■A: 寮・永井の部屋（夜）

岡野はカレーライスを乗せたトレーを持ち、部屋の前に立つ。
深呼吸し、奇妙な笑顔を作ってから、足で戸を開ける。
部屋には何人か生徒がいて、話していたり、漫画を読んでいる。
岡野「(近づいて行き）永井ー、お前の好きなカレーだぞー!」
奥で毛布にくるまっていた永井は返事をせず、背を向ける。
岡野は軽く息を吐いた後、「押っ忍」と周りに挨拶をしながら、中に入っていく。菊川や前田ら部員たちも付いてくる。
岡野が永井の枕元にカレーライスを置き、胡坐をかいて座る。
永井「(面倒臭そうに)……いらん」
岡野「食べないと体に悪いぞー(と手団扇で匂いを送る)」
永井「……俺は出んけえ」
岡野「何を?」
永井「……俺は決勝には出ん」
岡野「……でも……勝ったら全国。プロになれるかもしれないんだぞ。それが……お母さんの願いでもあるんじゃないの?」
永井は急に飛び起きて、怒りに任せて岡野の襟首を掴む。
永井「勝手に母ちゃんの願い語んなや……」
岡野「……ごめん……」
永井「(襟首から手を離し)俺はプロんなって、母さんを楽させたかっただけじゃけぇ……。」
菊川「(泣きながら)……」
永井「……ワシの家族は……もう、誰もおらん……」
前田「俺も……、同じや」
永井「(面倒くさそうに前田を見て)何がですか?」
前田「わしはガキん頃、ヤクザやった親父が目の前で殺されてな」
全員「……!」
前田「母親はその後、消えちまって、施設で育ったけぇ……。俺も、ひとりぼっちじゃ……」
永井「……」
前田「……でも、このサッカー部に入って、俺、気づいたんや。俺、笑ってること、めっちゃ多くなってんだわ。ここにいていいんだって思えるようになったんだわ」
菊川「(泣きながら)前田さん……」

前田「松江北浜高サッカー部は、ワシの家族や」
光夫「そうや、前田さん。サッカー部はワシらの家族や」
岡野「そうだよ、永井！　俺たちは家族だよ!」
永井「……」
岡野「俺が父親で……、お前が母親。(光夫を指して)長男、(瀬田を指して)次男、(木村を指して)……おじいちゃん、(菊川を指して)……亀、（前田を指して)で、おばあちゃん」
前田「なんで俺がおばあなんじゃ!」
岡野「長男は光夫に取られちゃったんで、おばあでお願いします」
前田「長男にせいや！　俺、ハタチやぞ!」
と言うと、永井が笑い出し、みんなに笑いが伝染する。
岡野「永井……、みんなで全国に行こうよ」
前田「永井、家族みんなで行こうや」
永井は一人一人を見やった後、バッと立ち上がる。
永井「あー、めんどくせー奴らじゃ!」
岡野「え……？」
永井「お前らはホンマに諦め悪いのお!」
岡野「諦めんかったら、いつまでも希望はある……だろ?」
岡野が手を差し出すと、永井は笑みを浮かべ、握手を交わす。
皆はお互いに見合って一瞬の間の後、
全員「よっしゃあ！　（と拳を上げて立ち上がる）」
すると岡野が服を脱いで全裸になり、
岡野「うおおお！　ぜってー勝つぞー!」
と叫ぶと、皆も服を脱ぎ始め、永井以外、全裸で雄叫びを挙げる。
全員「えい、えい、おー!」
菊川「(俯きながら小声で)亀……」

■B: 県立サッカー場・スタンド最前列　※女性はこちら

たみこ「なんであんなこと言うのよ？　雅行は一生懸命やってるんだから、それでいいじゃない！」
正明「……だからだ」
たみこ「?」
正明「一生懸命やるからこそ、ダメだった時に辛いんだ……」

たみこ「そんなの……、やってみなきゃ、分かんないじゃない」
正明「いいや、分かる……」
たみこ「分かんない」
正明「分かる」
たみこ「分かんない!」
正明「分かる!」
×　　×　　×
藤島がサラサラの髪をかきあげ、スタンドに手を挙げると、女子生徒から「きゃーーー!」と黄色い歓声が飛ぶ。
×　　×　　×
相手校が盛り上がっているのを見て、たみこが立ち上がる。
たみこ「(鉢巻を締め直し)雅行！　あんな青臭い奴ら、バシッとやっつけちゃいなさいよー！　(振り向いて)ねぇ、あなた!?」
周りにジロジロ見られているたみこを、正明は他人のフリをして、渋面を浮かべながら、杖を持って座っている。

■C: サッカー協会のオフィス

岡田監督が窓際の椅子に座り、真剣な表情で本を読んでいる。
表題は『はじめてのマネジメント入門』。
『部下のモチベーションを上げる方法』という章には、「みんなで話し合う場を作る」という文言の他に、
岡田監督 M「部下があなたの判断に疑問を投げかけてくることもあるでしょう。その時は以下の3つを実践してください。1.しっかり話を聞く、2.共感する、次が実はポイントです。3.「秘密兵器」だと告げる」
と書いてある。岡田監督が「なるほどな〜……」とうなずいていると、コンコンとドアを叩く音が鳴り、間髪入れず、岡野が真剣な表情で入ってくる。焦った岡田監督は、咄嗟に表紙を伏せて本をテーブルに置き、眼鏡を探す仕草をするが、ふと気づいて既にかけている眼鏡を、指で持ち上げながら立ち上がる。
岡田監督「……岡野、どうした？」
岡野「岡田監督、ちょっと……聞きたいんですけど……」
岡野の真っすぐな視線に、岡田監督はハッとする。

岡田監督M「1.しっかり話を聞く」
テロップ「1.しっかり話を聞く」
岡田監督「なんでも……、言ってみろ」
岡野「俺……、どうして試合に出してもらえないんですかね？　1回も出番がないの俺だけですしる、俺、日本の役に立てます!」
岡田監督は窓の外に視線を移して、ずり落ちた眼鏡を直しながら、
岡田監督M「2.共感する」
テロップ「2.共感する」
岡田監督「……確かにそうだな……お前の気持ちは分かる」
岡野「(恐縮して) あ、ありがとうございます」
岡田監督「試合に出さないのは戦術的な理由だ。お前は……」
岡野「……?」
岡田は言葉が出ず、サッと振り返って、閉じた本をパッと開く。
岡田監督M「3.秘密兵器だと告げる」
テロップ「3.秘密兵器だと告げる」
岡田監督「(背筋を伸ばし)お前は……、秘密兵器なんだよ……」
岡野「(表情が明るくなり) ひ、秘密兵器ですか？」
岡田監督「そうだ。秘密兵器だ……。(咳払いをして)お前のスピードを必要とする時は必ず来る。だけどな、中途半端に出して、お前のことを研究されたくないんだ。分かるだろ?」
岡野「(意気投合し)分かります!」
岡田監督「岡野、辛いと思うけどな、勝負の神様は細部に宿るんだ。チームのために、耐えてくれ」
岡野「(背筋を伸ばし)耐えるために生まれてきました!」
岡田監督「『秘密兵器』のお前に、1つ頼みがあるんだ……」
岡野「(鼻息荒く)秘密兵器、何でもします！」